

第7回講義予習課題

助教授 濱本 正太郎

注意

条約法を学ぶ際に条約法に関するウィーン条約が必読であったのと同じように、この章を理解するためには、国際法委員会の「国家責任条文」を熟読しなければならない。教科書は、同条文と照らし合わせながら読むこと。同条文については以下の「用語」の箇所を参照されたい。

注意すべき問題

9.1 General

9.2 Traditional Law

- ・伝統的規則の内容は？
- ・伝統的規則の特徴は？

9.3 The Current Regulation of State Responsibility: An Overview

- ・新たな規則の特徴は？
- ・aggravated responsibility の特徴は？

9.4 'Ordinary' State Responsibility

9.4.1 Preconditions of State Responsibility

9.4.1 (a) Subjective Elements of International Delinquency

9.4.1 (a) (1) Imputability of an International Wrong to a State

- ・ケール(Caire)事件、ニカラグア事件、テヘラン人質事件の事実関係と判旨を整理。関連する国際法委員会国家責任条文と比較。

9.4.1 (a) (2) The Question of Whether the Fault of State Officials Is Required for State Responsibility to Arise

9.4.1 (b) Objective Elements

9.4.1 (b) (1) Inconsistency of State Conduct with an International Obligation

9.4.1 (b) (2) The Question of Damage

- ・ p. 192 の”one school of thought”の説をまとめる。
- ・ それに対する Cassese の見解は？

9.4.1 (b) (3) Circumstances Precluding Wrongfulness

9.4.1 (b) (4) Circumstances Excluding Wrongfulness and Duty to Pay Compensation for the Damage Caused

9.4.2 Consequences of the Wrongful Act

- ・ Air Service Agreement 事件判決の内容と、それに対する Cassese の批判をまとめる。

9.5 ‘Aggravated’ State Responsibility

9.5.1 Subjective and Objective Elements of the Wrongful Act

- ・ ”Ordinary Responsibility”との違いは？

9.5.2 The Consequences of the Wrongful Act in Cases of Aggravated Responsibility

- ・ ”Ordinary Responsibility”との違いは？ 特に(iii) Rights, powers and obligations of other States においてはどうか？

9.5.3 Trends in State Practice

- ・ ここで扱われている事例がどの点で”aggravated State Responsibility”の事例と考えられるか、整理する。

9.6 The Special Regime of Responsibility in Case of Contravention of Community Obligations Provided for in Multilateral Treaties

- ・ このセクションの内容は、人権法・人道法を学んでからでないと理解できないので、とりあえず飛ばして良い。

9.7 The Current Minor Role of Aggravated Responsibility

用語

- p. 182 international arbitral tribunals = 国際仲裁裁判所 とりあえず単純に「裁判所」と思っておいて良い。
- p. 182 the Fourth Hague Convention of 1907, on the Laws and Customs of War on Land = 陸戦ノ法規慣例ニ関スル条約
- p. 183 restitution in kind
- p. 184 substantive rules
- p. 185 These rules are expected to become... この教科書の出版後、国連国際法委員会が作成した条文草案が国連総会決議で“take note”された。条約とすることに合意が得られなかったための措置。条文は各条約集（三省堂 p. 75、東信堂 p. 129、有斐閣 p. 83）に訳されている。
- p. 185 primary rules, secondary rules
- p. 187 the 1960 Convention on... 原子力の分野における民事責任に関する条約
- p. 187 the 1962 Convention on... 原子力船運航者の責任に関する条約
- p. 188 Article 9 of ILC Draft (2000) 国連総会決議で take note された最終版(2001 年版)では 7 条。
- p. 189 Article 5 of ILC Draft (2000) 2001 年草案でも 5 条。
- p. 190 Article 6 of ILC Draft (2000) 2001 年草案では 8 条。
- p. 191 force majeure
- p. 192 material damage, moral damage
- p. 193 the ILC Reports 国際法委員会の報告書。Yearbook of the International Law Commission（社会科学系図書館、国連寄託図書館に所蔵）に含まれている。

事例・裁判例

- p. 186 Air Service Agreement 判例集 90
- p. 187 Immunity from Legal Process of a Special Rapporteur of the Commission on Human Rights 日本語評釈として、杉原高嶺「人権委員会の特別報告者の訴訟免除に関する紛争」国際法外交雑誌 101 巻 4 号(2003 年)
- p. 188 Caire 日本語要約が波多野里望・東壽太郎編『国際判例研究 国家責任』（三省堂、1990 年）にあり。
- p. 190 Nicaragua 判例集 118
- p. 190 Tadić 判例集 123 に事実関係あり。ただし、ここで引用されているのは 1999 年の上訴審判決であり、判例集には掲載されていない。上訴審判決について、また、ここで論じられている私人行為の国家への帰属についての裁判例の動きについては、薬師寺公夫「国際法委員会『国家責任条文』における私人行為の国家への帰属」山手治之・香西茂編『国際社会の法構造』（東信堂、2003 年）参照。

- ・ p. 191 US Diplomatic and Consular Staff in Tehran 判例集 87
- ・ p. 194 Serbian Loans 判例集 93
- ・ p. 194 the Rainbow Warrior 判例集 113B
- ・ p. 196 the Gabčíkovo-Nagymaros Project 判例集 85
- ・ p. 198 Corfu Channel 判例集 33

参考文献（上記文献のほか）

長谷川正国「国際法における国家の責任」国際法学会編『日本と国際法の100年 第1巻 国際社会の法と政治』
（三省堂、2001年）